

七 山之口麓人形浄瑠璃に取り組んで

山之口町は、都城盆地の東側にある人口約七千五百人ほどの町です。人形浄瑠璃とは、三味線と語りと人形操りが一体となり物語などを演じる「人形芝居」をいいます。山之口町の麓地区に伝わる「文弥節」とは、江戸期に大阪で活躍した「岡本文弥」が語る「泣き節」「愁い節」とも呼ばれる哀愁をおびた独特の節回しのことです。一体の人形を一人の人形遣いで操ります。文弥節人形浄瑠璃を昔ながらの形で継承している所は、全国でも四か所ほどしかありません。

定期公演が近づいてきました。ぼくは、公演の一週間ほど前になると、毎晩、人形浄瑠璃の練習に行きます。公演の内容は三百年ほど前から伝わる「出世景清」と「門出八嶋」という二つの物語からなり、その間には狂言が入ります。この物語を四つの場面に分けて、年四回の公演でそれぞれ演じるのです。四回の公演をすべて見て、ようやく全部の物語がわかるのです。

ぼくの父は、人形浄瑠璃の保存会の一員です。ぼくは小学校二年生の時に、父に連れられて、初めて人形浄瑠璃を見ました。テレビで見る人形劇と同じように、上手に動かしているのがとてもおもしろくて、見入ってしまいました。

その後も、父と一緒に練習を見に行くことがときどきあり、しだいに「自分でも人形を動かしてみたい。」と思うよ



うになりました。しかし、当時のぼくはまだ幼く、人形を操作するのは無理だと思われたのか、ときどきさわらせてもらっただけでした。それでも毎回のように父と一緒に練習を見に行き、小学校六年生からはサークル活動の一環として人形浄瑠璃を学び始めました。いざ自分で人形を持って、台本に合わせて動かしてみると、なかなか自分の思うようにはできません。しかも、自分の出番が分からなかったり、それぞれの場面で自分の人形がどのような状態になっているのかもよく分かりません。表情のない人形で「悲しみ」「泣いている」様子を表すことはとても難しく、なかなかうまくありませんでした。ときには嫌になつて、やめたくなつたこともありました。

サークル活動の発表会で操つたのは、出世景清第四段、牢舎ろうしゃの段の阿古屋あこやという女性の役です。阿古屋は、嫉妬しとどしん心から景清を訴え、そのため景清は牢舎ろうしゃに入れられてしまいます。そのことを知つた阿古屋は後悔し、景清の二人の子どもを連れて六波羅ろくはらの牢舎前で詫わづらびるといふ場面です。何度も何度も練習しましたが、阿古屋の気持ちがどれほどのものだったのか、またそれを人形でどのように表現すればいいのかが分かりませんでした。小学生だったぼくには、阿古屋の気持ちが理解できなかつたのです。そこで、阿古屋の役を演じている保存会の方に、手本を何度も見せてもらい、とにかく「悲しい気持ち」を表現しようと考えました。自分が悲しかったときのことを思い出しながら、毎晩毎晩、練習しました。公演のときも、講師の方のお手本や悲しかったときのことを思い出しながら、自分自身が人形にのりうつつ

たように無我夢中で操りました。ふと我に返ると、見ている人たちがみんな泣いています。ぼくの操っている阿古屋を見て泣いているのです。この時のことは、今でも忘れられません。

ぼくたちが公演を続けている人形浄瑠璃は、正しくは『山之口麓文弥節人形浄瑠璃』といわれています。町に残されている「出世景清」の台本は、もともと江戸時代の文政九年（一八二六年）に書き写されたもので、日本に残っている台本としては最も古いものだと思います。『山之口麓文弥節人形浄瑠璃』は大正時代まではさかんに上演されていましたが、しだいに演じられることが少なくなり、やがて昭和四年を最期にとだえていました。

しかし、自分たちのふるさとの貴重な文化遺産を何とか残したい、続けていきたいという人々が集まり、昭和二十六年に保存会が結成されたそうです。あちこちに散らばっていた人形を探すことから始めたそうですが、なかなか集まらなかつたそうです。人形がそろっても、浄瑠璃で難しいのは、あの独特の節回しです。これは本に書いて残っているものがありますが、それだけではうまく伝えられません。坂元さんという人が覚えていたことを頼りに、ようやく上演できるまでになったそうです。

もし、坂元さんが覚えていなくなつたら、山之口の浄瑠璃はもうこの世から消えていたかもしれません。そう考えると、今、自分がやっている



ことが不思議に思えました。

保存会の人たちは、この人形浄瑠璃をいつまでも伝えていくために、今でも麓かど小学校の五・六年生の希望者に教えています。約二十名ほどの小学生が、第二・第四土曜日の午前中に練習をしています。ぼくも小学生の時から人形にさわらせてもらい、人形を操ることの魅力を知りました。幼いときから人形にふれたり、公演をみたりすることが、いつまでもこの文化を残していくことに役立つと思います。

また、保存会の人たちは、この人形浄瑠璃を通して、町の活性化を図ろうと一生懸命です。人形浄瑠璃をきっかけにして、世代を越えた人たちとの交流が生まれ、ふるさとに誇りをもち、山之口町をいつまでも大切にしようという気持ちも生まれてくると考えています。

そのために保存会の人たちには、自分たちが練習する時間だけでなく、忙しい仕事の合間をぬっての人形浄瑠璃の研究や人に教えたりする時間が必要です。また、定期公演だけではなく、他の場所での公演にも行かなくてはなりません。大変な苦労があるのです。しかし、それでも人形浄瑠璃の保存に力を入れようとしているのです。

中学二年生になって最初の定期公演です。

練習に行ったぼくは、保存会の人たちから、「君も保存会に入らんね。」と誘われました。